

21世紀型学力向上推進緊急プロジェクト

長崎県読解力育成プラン

「本県の学力向上の取組は、他都道府県と比べて遜色がない」、また、「子供たちも、劣っているとは考えられない」にも関わらず、結果が伴わないのはなぜなのか。

その理由の一つとして、「学力が伸び悩む児童生徒は、そもそも問題を正しく読解できていないのではないか」、また、「教師の話を理解できていないのではないか」という、「読解力」に関する仮説が浮かび上がりました。

この仮説への対応策として、県教育委員会では、令和元年度からの3か年計画で「21世紀型学力向上推進緊急プロジェクト事業」に取り組んでいます。

その目的は、「各教科等の学力」や「学ぶ意欲」の土台となる能力である「読解力」を育成するための学習指導の在り方を明らかにし、その成果を公表するとともに、県内で広く活用していただくことによって、本県児童生徒の学力向上の基盤をつくろうとするものです。

今回は、モデル地区での実践などをもとに、「読解力育成のポイント」を示した「長崎県読解力育成プラン」をお届けします。このプランを契機として、読解力を向上させることの重要性を教職員全員で共通理解し、これまでの授業や教育活動に、「読解力の育成」を意識した改善を加えていただきたいと思います。

令和2年3月

長崎県教育委員会

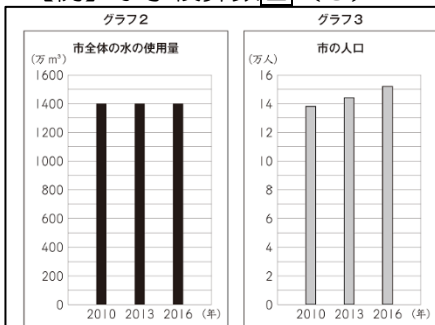
なぜ、「読解力の育成」なのか

■ なぜ、今「読解力の育成」なのか、本県の全国学力・学習状況調査における現状や、これからの時代を創る児童生徒に求められている能力をもとに確認します。

☆本県の全国学力・学習状況調査における現状

- ◆ 平均正答率の過去5年間の平均は、小学校国語・算数は 1.3 ポイント、中学校国語・数学は 0.5 ポイント全国を下回っている。
- ◆ 特に、小学校では、基礎的な知識・技能の定着について、低学年段階からの学習の積み上げに課題が見られる。
- ◆ 小中学校を総じて、複数の情報を読み解き、必要な情報を取り出したり整理したりすること、また、それらをもとに自分の考えをまとめることに継続的な課題が見られる。

【例】小学校算数 2 (3)



あやのさんが言うように、グラフ2とグラフ3を見ることで、2010年から2016年までの1人あたりの水の使用量についてわかることがあります。

2010年から2016年までの、3年ごとの1人あたりの水の使用量について、どのようなことがわかりますか。

下の 1 から 4 までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。
また、その番号を選んだだけを、グラフ2とグラフ3からわかることをもとに、言葉や数を使って書きましょう。

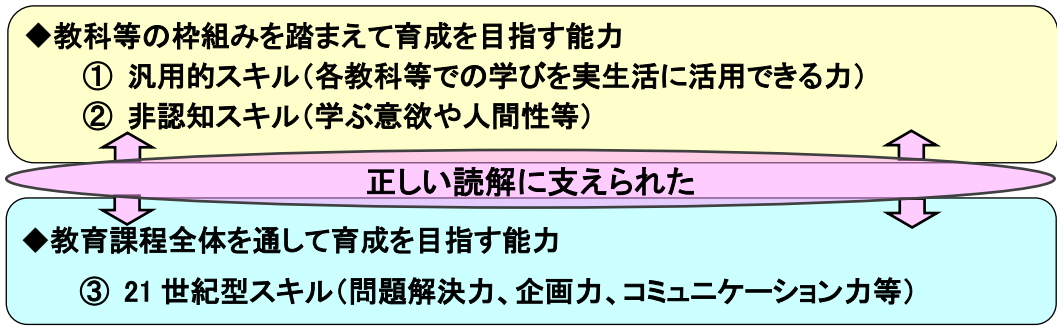
- 1 | 1人あたりの水の使用量は、減っている。
- 2 | 1人あたりの水の使用量は、変わらない。
- 3 | 1人あたりの水の使用量は、増えている。
- 4 | 1人あたりの水の使用量は、増えたり減ったりしている。

県の正答率 48.8%
全国との差 -3

- かいと: 私たちは、水を大切に使うといえるのでしょうか。
- ゆうか: 市全体の水の使用量はわかりますが、1人で水をどのくらい使っているのかわかりません。
- あやの: グラフ2とグラフ3を見ることで、1人あたりの水の使用量についてもわかります。

<仮説>
※学力が伸び悩む児童生徒は、問題が正しく読めない、教師の話が理解できないなど、**読解力に課題を抱えているのではないか。**

☆これからの予測困難な時代に児童生徒に求められる能力 (21世紀型学力)



これらのことから、本県の児童生徒の学力向上を図るためには、各教科の重点課題の克服とともに、教科等の枠を越え、「読解力」の育成を踏まえて授業を改善すること、また、そのための学習指導の在り方を明らかにすることが必要であると考えました。

■ では、ここで言う「読解力」とは、どのような力なのでしょう。先生方も、次のような疑問を感じたことがないでしょうか。



- ・「読解力」ってよく使う言葉だけど、どんな力のこと?
- ・「読解力」がある子供ってどんな子供? 国語の学力が高い子供? 算数・数学の文章題が解ける子供?
- ・「読解力」は、どうやって測るの?
- ・「読解力」は、どうやったら伸びるの?

あいまい...

リーディングスキルテスト（RST）の活用

- そこで、読解力を育成するための学習指導の在り方を明らかにするにあたり、「読解力」を目に見えるものにするために、また、これまであいまいだった読解の要素を明確にするために、リーディングスキルテスト（RST）を活用することにしました。

◆リーディングスキルテスト（RST）※とは

※一般社団法人 教育のための科学研究所 提供

- 国立情報学研究所を中心とした研究チームが開発した「汎用的な基礎的読解力」を測定・診断するテスト。受検者一人一人の読解の能力を診断することができるCAT版と、各受検者がそのときに解いた問題数や正答率のみをフィードバックするNON-CAT版がある。
- 教科書などの基本的な文章や図表、グラフからの情報などを読み取ることができるかを、6つの問題分野（6分野7項目）で評価。

◆6つの問題分野（6分野7項目）とは

① 「係り受け解析」…文の基本構造（主語・述語・目的語など）を把握する力

問題例：色やにおいて引き付けられた動物は、おしべの花粉を体につけ、別の花のめしべへと運び、植物の受粉を助ける。

植物の受粉を助けるのは（ ）である。

⇒動物

② 「照応解決」…指示代名詞が指すものや、省略された主語や目的語を把握する力

問題例：火星には、生命が存在する可能性がある。かつて大量の水があった証拠が見つかっており、現在も地下には水がある可能性がある。

かつて大量の水があった証拠が見つかっているのは（ ）である。

⇒火星

③ 「同義文判定」…2文の意味が同一であるかどうかを正しく判定する力

問題例：義経は平氏を追いつめ、ついに壇ノ浦でほろぼした。

平氏は義経に追いつめられ、ついに壇ノ浦でほろぼされた。

⇒同じである

④ 「推論」…既存の知識と新しく得られた知識から、論理的に判断する力

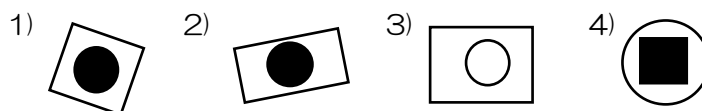
問題例：エベレストは世界で最も高い山である。

エルブルス山の高さはエベレスト以下である。

⇒正しい

⑤ 「イメージ同定」…文章を図やグラフと比べ、内容が一致しているかどうかを認識する力

問題例：角形の中に黒でぬりつぶされた円がある。正しいものを選択肢からすべて選びなさい。



⇒ 1) 2)

⑥ 「具体例同定」（理数と辞書の2項目）…言葉の定義を読んで、それと合致する具体例を認識する力

問題例：1とその数以外の約数を持つ整数を合成数という。合成数の例として正しいものを選択肢からすべて選びなさい。

1) 1 2) 2.2 3) 0.6 4) 9

⇒ 4)

- 本県の現状と、これら6つの問題分野（6分野7項目）の考え方から、県教育委員会では、

- 「読解力」とは、教科等の枠を越えて、各教科等の土台となる能力
→文章を正確に、速く理解できる。
→文章と図、表、グラフ等の関係を捉えたり、知識をもとに推論したりすることができる。

と定義しました。

長崎県の子供たちの「読解力」は、どんな傾向にあるの？



本県の子供たちの読解の傾向

- モデル地区の小学校第6学年 441 名と中学校第 1 学年 444 名、第2学年 440 名、第3学年 451 名、加えて県立中学校の第 1 学年 353 名、第2学年 344 名、第3学年 337 名の RST (NON-CAT 版) 受検結果をもとに、本県の子供たちの読解の傾向について分析したところ、次のことが明らかになりました。

分析結果

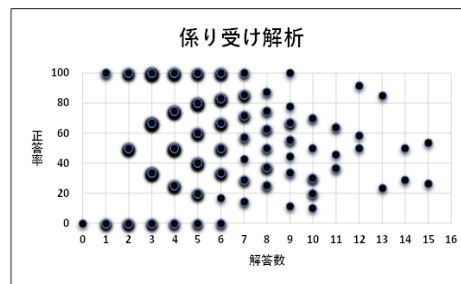
- ① 同一教室内で指導している子供たちには、読解力（正確さと速さ）に大きな差がある。
- ② まず、「係り受け解析」「照応解決」「イメージ同定」「具体例同定」の能力の育成が重要である。
- ③ 読解力と全国学力・学習状況調査の結果は、高い相関関係にある。

以下、それぞれの分析内容について説明します。

分析結果① 同一教室内で指導している子供たちには、読解力（正確さと速さ）に大きな差がある。

右の<例>は、小学校第6学年の「係り受け解析」に関する、正答率と解答数の分布図です。右上にいくほど、正答率が高く解答数も多い（正確で速い）ことを示します。また、ドットが大きいほど人数の重なりが多いことを示しています。全ての問題分野のドットの散らばり状況から、同一教室には、読解力（正確さと速さ）に大きな差がある子供たちが混在している、ということが分かりました。

<例>小学校第6学年 「係り受け解析」



分析結果② まず、「係り受け解析」「照応解決」「イメージ同定」「具体例同定」の能力の育成が重要である。

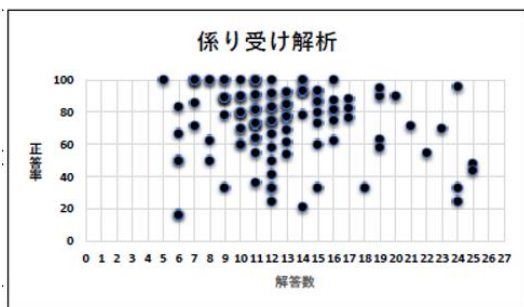
【市町立 A 中学校第3学年】と、全国学力・学習状況調査において A 中学校よりも3教科の平均正答率が 16~21 ポイント高い【県立 B 中学校第3学年】の結果を比較しました。

下の<例1>は「係り受け解析」のグラフを比較したものです。【市町立 A 中学校第3学年】よりも【県立 B 中学校第3学年】の方が、グラフの上側にドットが分布しています。

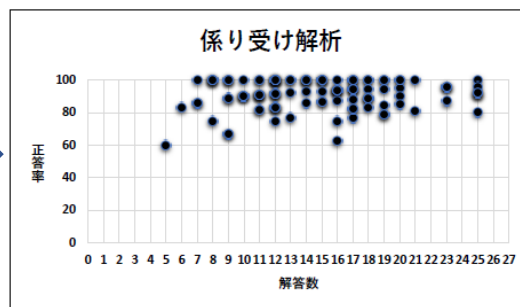
「照応解決」「イメージ同定」「具体例同定」でも同様の結果が見られました。つまり、「係り受け解析」「照応解決」「イメージ同定」「具体例同定」において差が大きいということが分かりました。

<例1>

グラフ1【市町立 A 中学校第3学年】



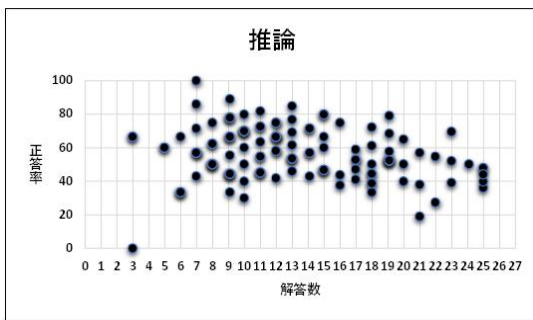
グラフ2【県立 B 中学校第3学年】



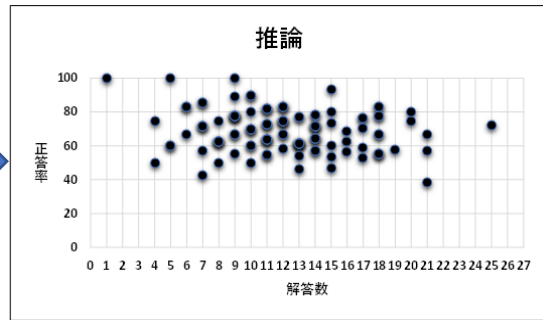
次の<例2>は、「推論」のグラフを比較したものです。【市町立 A 中学校第3学年】と【県立 B 中学校第3学年】の分布の違いを、<例1>「係り受け解析」の分布の違いと比較すると、散らばり方の差が小さいことが分かります。

<例2>

グラフ1【市町立A中学校第3学年】



グラフ2【県立B中学校第3学年】



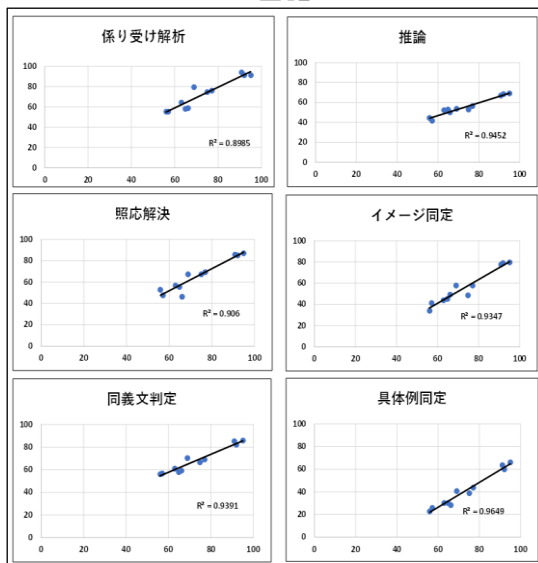
以上のことから、読解の基礎である「係り受け解析」「照応解決」、文章と図や表、グラフ等の関係を捉える「イメージ同定」、言葉の定義をもとに考える「具体例同定」の育成が、まず重要であるということが分かりました。

分析結果③ 読解力と全国学力・学習状況調査の結果は、高い相関関係にある。

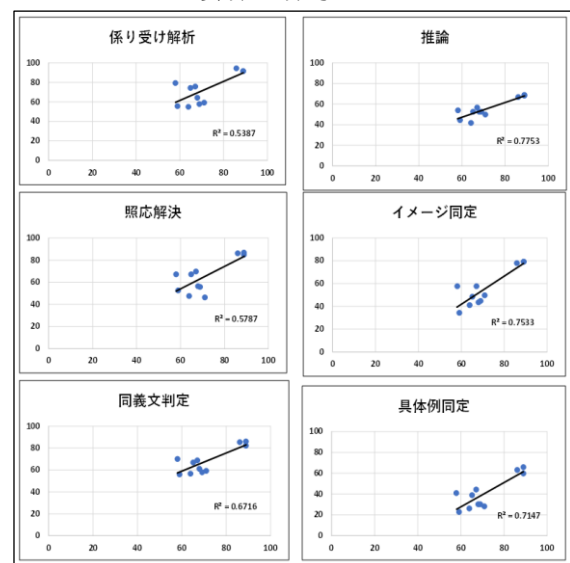
6つの問題分野の正答率と全国学力・学習状況調査の平均正答率の関係について分析したところ、今回受検したNON-CAT版であっても、各問題分野の平均正答率が高いほど、全国学力・学習状況調査の平均正答率が高いという傾向が見られました。今後、本来のRST（CAT版）が測る能力値との相関についても、明らかにしていきたいと考えています。

グラフ【各問題分野の平均正答率と全国学力・学習状況調査の平均正答率の相関関係】

<国語>



<算数・数学>



※縦軸：各問題分野の平均正答率(%) 横軸：全国学力・学習状況調査の平均正答率(%)

■ 県教育委員会では、これらの分析結果を踏まえ、「読解力育成のポイント」として次の3つを提案します。

読解力育成のポイント

- 1 授業では、教師の発する言葉や提示した文章が、教師の意図どおり子供たちに伝わるように工夫する。
- 2 読解力の基礎として、語彙力や漢字力、構文力等を、小学校低学年から身に付けさせる。
- 3 6つの問題分野（特に、「係り受け解析」「照応解決」「イメージ同定」「具体例同定」）を日頃の授業づくりの視点に加える。

具体的に、どのように改善していけばいいの？



読解力育成のポイント

1 授業では、教師の発する言葉や提示した文章が、教師の意図どおり子供たちに伝わるように工夫する。

「ここに書いてあるでしょう」で済ませたり、「分かっているはず」「覚えているはず」という考えで授業を進めたりするのはなく、教師の意図どおり子供たちに伝わるように、言葉や文章を見直すことが大切です。

ここでは、『学力向上のための三つの提案』の、「めあて」で考えてみましょう。

<例1>

めあて：「工夫してとび出すカードをつくろう」（小学校第4学年図画工作科）

この「めあて」では、「工夫して」という言葉のイメージや受け取り方が、子供たちによって異なります。例えば、「もらった人が喜ぶように、形・大きさ・色を工夫して、とび出すカードをつくろう」と目的を明確にすることによって、とび出すものの形や大きさ、色の組み合わせなど、具体的な工夫のイメージがわいてきます。

<例2>

めあて：「小学校で学んだ比例のグラフを、変域を負の数にひろげて考えてみよう。」
(中学校第1学年数学科)

この「めあて」では、子供たちが「変域を負の数にひろげる」の意味を理解できているかが授業展開に大きく関わります。「めあて」を設定する前後で、「変域」の定義や「ひろげる」という言葉の意味を全体で確認し、共通の認識を持たせることが大切です。

2 読解力の基礎として、語彙力や漢字力、構文力等を、小学校低学年から身に付けさせる。

読解力の基礎を身に付けさせるために、次の<例>のような取組を、小学校低学年から、普段の授業の中で確実に積み重ねていきましょう。

<例>

- 意味が分からない言葉が出てきたら、辞書などを使って調べさせる。
- 「とても」「たくさん」「すごく」といったあいまいな表現ではなく、具体的な表現や図を用いて説明させる。
- 教科を問わず、教科書や問題文などを音読させる。
- 「まず」「次に」「または」「ならば」など、文と文の順序や接続を表す言葉を正しく使わせる。

また、『学力向上のための三つの提案』でいう「ねらいに即した『書く活動』を重視する」ことも大切です。例えば、自力解決の場面で「題意に沿って、自分の考えを理由や根拠を明確にして書く活動」などを積極的に取り入れましょう。

3 6つの問題分野（特に、「係り受け解析」「照応解決」「イメージ同定」「具体例同定」）を日頃の授業づくりの視点に加える。

6つの問題分野（6分野7項目）を日頃の授業づくりの視点に意識して加え、読解力の育成を図ることが大切です。

係り受け解析	<ul style="list-style-type: none"> 教師が意図的に主語や述語、目的語などを問う。 → P8（小国）
照 応 解 決	<ul style="list-style-type: none"> 「それ」「これ」などの、指示代名詞が示す言葉や内容について、線を引くなどして読み取らせ、全体で確認する。 → P8（小国）、P9（中社） 省略された主語や目的語を補うように指示する。
同 義 文 判 定	<ul style="list-style-type: none"> 複数の意見や考え方が同じかどうか、グループで話し合わせる。 → P8（小理）、P10（中理） 自分の意見や考え方がモデルと同じかどうか考えさせる。
推 論	<ul style="list-style-type: none"> 既習事項等を根拠として新しい知識を獲得させたり、考察させたりする。 → P8（小理）、P10（中理） 文章中に書かれている内容等について、根拠を明確にして自分の考えを述べさせる。
イ メ ー ジ 同 定	<ul style="list-style-type: none"> 文章から読み取ったことを絵や図、表などを用いて整理させる。 → P7（小算）、P9（中社） 図や表、グラフから読み取ったことを、言葉や文章で表す活動に取り組ませる。 → P9（中数）
具 体 例 同 定	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の定義や意味を正しくおさえた上で、考えたり話し合ったりする活動に取り組ませる。 → P9（中数）、P10（中理） 様々な事例や自分の書いた文章が、定義に合っているか確認させる。

次ページから、6つの問題分野（6分野7項目）を視点に加えた授業実践事例を紹介します。



特別な取組を始めるのではなくて、普段の授業で使っている言葉を見直したり、これまでの手立てに読解力育成の視点を加えたりしていけばいいですね。

授業実践事例

小学校 第3学年 算数科 **問題分野：イメージ同定**

単元名：べつべつに、いっしょに（啓林館：わくわく算数3下）

本時の目標：加法と乗法を組み合わせた問題を考えるにあたって、「べつべつに考えて」解く方法の他に「まとまりを考えて」解く方法があることに気づく。

学習場面	指導上の工夫	問題分野
・問題を把握する場面	・問題場面を絵や図に表すよう促し、場面の様子をつかませてから自力解決に向かわせる。	・イメージ同定
・2つの解決方法を比較する場面	・全体で考えを共有する際に、問題文、図、式を関連付けながら説明させる。問題文や式の中の数値の意味を問い、個数が同じであれば、「べつべつに考えて」解く方法だけでなく「まとまりを考えて」解く方法があることに気づかせる。	・イメージ同定

<板書例>

1本70円のジュース6本と、1個30円のみかんを6こ買いました。
何円はらえばよいですか。

【べつべつに考える方法】

(式)

$$\begin{array}{r} 70 \times 6 = 420 \\ 30 \times 6 = 180 \end{array}$$

【まとめて考える方法】

(式)

$$\begin{array}{r} 70 + 30 = 100 \\ 100 \times 6 = 600 \end{array}$$

☆実践のポイント

立式し計算することができても、問題や式の意味を正しく理解できているとは限りません。問題場面と、自分の考えを表す図と式を一つずつ対応させ、問題や式の意味を正しく理解する力を高めましょう。

本授業に限らず、問題把握の場面では、イメージ同定の視点を意識して指導することが重要です。

◆問題場面を正しく絵図や表に表す

◆読み取ったことや考えたことが、絵図や表のどの部分に対応するか正しく示す

また、意図的に誤った絵図や表を示して子供たちの思考を揺さぶったり、式の意味を言葉や文章で説明させたりすることも有効な手立ての一つです。

小学校 第4学年 理科 **問題分野：同義文判定、推論**

単元名：季節と生き物（秋）（大日本図書：たのしい理科 4年）

本時の目標：秋の頃、身の回りの動物や植物の様子がどのようにになっているのか調べる活動を通して、その変化と気温を関係付けて考察し、自分の考えを表現することができる。

学習場面	指導上の工夫	問題分野
<ul style="list-style-type: none"> 植物の変化について考察する場面 	<ul style="list-style-type: none"> 春や夏の植物の様子と温度の関係について学んだことや、秋の植物を観察して分かったことを、板書等をもとに整理させ、自分の考えをまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 推論
<ul style="list-style-type: none"> 学習のまとめを行う場面 	<ul style="list-style-type: none"> 個人でまとめた後、友達と開き合い、共通点や相違点をもとに各自でまとめを修正させ、学級全体でまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 同義文判定

☆実践のポイント

植物の変化について自分の考えをまとめる場面では、既習の内容や観察結果を根拠として考えに示させることが大切です。ここでは、

◆既習事項等を関係付けて考察する

といった推論の視点を意図的に取り入れています。また、

◆自分や友達の考えの共通点、相違点を考える

という同義文判定の視点でまとめやその修正を行うことは、他教科においても有効です。

小学校 第5学年 国語科 **問題分野：係り受け解析、照応解決**

単元名：説明の仕方の工夫を見つけ、話し合おう

（教材文「天気を予想する」 光村図書：国語五 銀河）

本時の目標：文章の内容を的確におさえ、筆者の考えをとらえることができる。

学習場面	指導上の工夫	問題分野
<ul style="list-style-type: none"> 文章の内容をとらえる場面 	<ul style="list-style-type: none"> 複数の主語と述語の関係で作られている文もあることを確認し、内容を正確にとらえさせる。 （例）これらの観測で得た情報は、気象庁のスーパーコンピュータに送られ、そこで、何種類もの予想図が作成されます。 主語① 述語① 主語② 述語② 指示語の示す内容を確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 係り受け解析 照応解決

☆実践のポイント

本授業では、文章を読んで必要な情報を見つけ、叙述をもとに正確に理解することを目的としています。指導にあたっては、

◆複数の主語と述語の関係を正確にとらえる

◆指示語の内容をていねいに確認する

といった係り受け解析と照応解決の視点が大切です。なお、主語と述語の関係については、低学年から指導を積み上げていくことが、読解力の確かな育成につながります。

中学校 第1学年 社会科 **問題分野：照応解決、イメージ同定**

単元名：中世の日本・東アジアの関わりと社会の変動・応仁の乱と戦国大名
(東京書籍：新しい社会 歴史)

本時の目標：戦国大名の領国支配の特徴から、応仁の乱が社会に与えた影響を考えることができる。

学習場面	指導上の工夫	問題分野
・応仁の乱が起こった原因を資料から読み取る場面	・電子黒板等に資料を提示し、読み上げながら指示語等の内容を確認する。 ・人物名のカードを用いて人物の関係を図に表して確認する。	・照応解決 ・イメージ同定

<電子黒板イメージ(一部)>

室町幕府の8代将軍は足利義政である。彼は子どもがいなかったため、弟の義視^{よしみ}を跡継ぎにしようとした。しかし、まもなく妻の日野富子^{ひのとみこ}との間に、息子の義尚^{よしひさ}が生まれた。これに足利義政と妻の間に、息子の義尚が生まれたこと

よしの 跡継ぎ候補がのりとなり、討立が起こった。足利義政は、管領を務める細川勝元^{ほそかわかつもと}に主将

☆実践のポイント

本授業では、応仁の乱が社会に与えた影響を考えるために、応仁の乱が起こった原因を資料から読み取り、確認します。教科書や資料集では、似たような言葉(人物名)や指示語が多く用いられており、理解が難しい場合があります。指導にあたっては、

- ◆電子黒板等を活用して指示語の内容を確認する
- ◆人間関係やできごとを図式化して整理する

といった照応解決やイメージ同定の視点で、文章の内容を正確に理解させ、次の学習活動に円滑につなげることが大切です。

中学校 第2学年 数学科 **問題分野：推論、イメージ同定、具体例同定**

単元名：図形の性質と証明(啓林館：未来へひろがる数学2)

本時の目標：2つの角が等しい三角形は二等辺三角形になることを証明することができる。

学習場面	指導上の工夫	問題分野
・証明の見通しを立てる場面 ・証明を進める場面	・二等辺三角形の定義を、言葉と式で確認する。 ・証明の根拠となることから図のどの部分になるのかを明確に示させる。また、既習の図形の性質を、カードで提示する。	・具体例同定 ・イメージ同定 ・推論

☆実践のポイント

本授業では、既習であるはずの図形の定義があいまいになっていないだろうか、という視点から、定義を振り返って確認する場面を設定しています。さらに、根拠となる情報を選択させる手立てとして、カードを活用しています。図形の性質の考察では、

- ◆既習の図形の性質をもとに、根拠となることから明らかにする
- ◆定義を「～とは、…である。」と言葉で確認する

といった推論や具体例同定の視点が必要です。本授業に限らず、定義を振り返り、あいまいな認識を明確にすることは、数の性質などを考察する場面においても大切です。

中学校 第1学年 理科 **問題分野：同義文判定、推論、具体例同定**

単元名：身のまわりの現象（東京書籍：新編 新しい科学1）

本時の目標：高度による気圧の違いについて、実験における装置や操作の意味を自然の事物・現象と対応させて考察することができる。

学習場面	指導上の工夫	問題分野
<ul style="list-style-type: none"> 実験結果を振り返り、考察する場面 	<ul style="list-style-type: none"> 装置や操作が自然の事物・現象の何に対応しているのか、理由を含めて確認させる。 「力」に関する用語の定義をカードで示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 推論 具体例同定
<ul style="list-style-type: none"> まとめの場面 	<ul style="list-style-type: none"> 自他のまとめを互いに比べ、共通点や相違点を整理しながら、同じ意味であるかどうか判断する。 	<ul style="list-style-type: none"> 同義文判定

<提示例>

実験	①菓子袋が膨らむことを調べる	②ペットボトルがへこむことを調べる
方法	耐圧瓶の中に、ふたをしたしょうゆさしを入れる。次に、 <u>空気を抜く装置</u> を使って、耐圧瓶の中の空気を減らす。	耐圧瓶の中に、ふたをしたしょうゆさしを入れる。次に、 <u>空気を入れる装置</u> を使って、耐圧瓶の中の空気を増やす。
予想される結果	瓶の中のしょうゆさしは、膨らむ。	瓶の中のしょうゆさしは、へこむ。

山に登っていくと、ふもとに比べて、まわりの気圧が低くなるから、空気を抜く装置で、耐圧瓶の中の空気を減らすことは、山に登っているときに対応し、ふたをしたしょうゆさしは菓子袋に対応する。

山を下りるときは、山頂に比べて、まわりの気圧が高くなるから、空気を入れる装置で耐圧瓶の中の空気を増やすことは、山を下りているときに対応し、ふたをしたしょうゆさしは、ペットボトルに対応する。

考察結果について全体で共有する際には、口頭で説明させるだけでなく、ノートやワークシートに記述させたり、実験の記録に線を引いて確認させたりすることが大切です！

これらに加えて…

「まわりの気圧のことは、『大気圧』とよんだね。『大気圧』とは？」と、用語の定義を尋ね、カードを用いて確認します。

☆実践のポイント

本授業は、実験結果を振り返り、登山の際に菓子袋とペットボトルの膨らみの変化が起きる理由について考察する場面です。指導にあたっては、

- ◆「～だから、…に対応する」のように、根拠をもとに説明する
- ◆既習の用語の定義を振り返る

などの推論や具体例同定の視点で、既習事項と関連付けながら、科学的な探究が進むよう工夫しています。本授業に限らず、他の分野においても、実験結果を考察する場面では、推論や具体例同定の視点を意識して、授業改善を図ることが大切です。また、

◆複数の「まとめ」を比較し、同じ意味であるかどうかを判断するという同義文判定の視点で授業のまとめを行うことは、他教科においても有効です。

※すべての実践に共通することとして、「主語述語の関係」（係り受け解析）や、「指示代名詞が適切か」（照応解決）などを意識するよう指示することが大切です。